

近代朝鮮半島における「宗教研究」の流れに関するメモ

川瀬 貴也

0. はじめに

本稿では、近代の朝鮮半島における「宗教研究」の概略を追い、その傾向性を明らかにしたい。

韓国（朝鮮半島）の宗教研究の起源をどこに探るのは容易なことではない。朝鮮半島における「宗教」研究の起点（画期）をどこに置くべきかという疑問には、「19世紀のウェスタン・インパクトだけでなく、儒学などの伝統的な学問からの流れもあった¹。単なる輸入学問ではない²」という指摘ができるだろう。しかし、「他宗教」との比較がないうちは、近代的な宗教研究とは言い難い。例えば朱子学一辺倒の立場からの陽明学、西学（カトリックの知識体系）、東学、巫俗批判は「宗教研究」と言えるだろうか？やはり、我々が想定する「宗教研究」の起源は、19世紀末と考えてよかろう。

近代以降について考えれば、プラス・マイナスも含めて西洋人や日本人の研究の影響を考えざるを得ない。別言すれば、我々に課せられている課題とは、現在の韓国の宗教研究が、戦前の遺産（負の遺産も含めて）をどれだけ継承しているか、もしくはどれだけそれを克服しているか（継承していないか、断絶しているか）、という視点³（ポストコロニアル的視座）をもって振り返ることであろう。そもそも、朝鮮語の「宗教 종교」という概念の近代性⁴そのものも考慮に入れねばならない。この「宗教」という語彙自体、日本同様「翻訳語」としての出自であるし、しかも朝鮮は日本からこの単語を輸入したのである。

なお、語彙的なことに言及すれば、今日我々が想像する「宗教的な営み」全般に対しては、「教」という言葉より「学」という言葉が包括的な意味を有する語として朝鮮王朝末期には選択されている（道学、性理学、儒学、西学、東学、というネーミングを見よ）。後に「科学」「近代知」にのみ「学」が用いられ、この用法が衰退したとされる。同じ漢字文化圏とはいえ、中国、朝鮮、日本では漢字自体のニュアンスが異なり、それ故日本で編み出された翻訳語としての漢熟語が、ある意味中国古典とは切り離された「新鮮」なニュアンスを帯び、大陸に輸出されることとなったのである⁵。

では以下では具体的に、朝鮮半島の宗教がどのように研究されてきたのかを学説的に追っていくことにする。

1. 戦前の京城帝国大学の「宗教」研究

まずは、「起源」としての日本人の活動に着目してみよう。世界中の「植民地」で、キリスト教宣教師などによる「観察」及び本国への報告が、いわゆる「安楽椅子の人類学者」の思考の材料となり、植民地をめぐる知の体系を形成していったのは言うまでもないが、朝鮮半島においても、欧米のキリスト教宣教師のみならず、早い時期から朝鮮半島に渡った日本人による「風俗」「旧慣」についての研究及び観察、蒐集が行われた。その集大成の代表例をあげるならば、^{いむむら}今村 軞の『朝鮮風俗集』（ウツボヤ書籍店、1914年）や、朝鮮総督府中枢院『旧慣制度調査事業概要』^{とらふ}⁶（1938年）があげられよう。前者は、警察官であった今村が地方勤務の経験から朝鮮人の

風習・風俗を調べることの必要性に目覚めて編まれたものである。後者は朝鮮総督府が、朝鮮における旧慣制度調査事業の概要と、民事慣習中の物権・債権のうち主として私法上の法律習慣を調査した資料が収録されている。

アカデミックな制度としては、京城帝国大学が1924年に予科を開設し、二年後の1926年に法学部と医学部の二学部体制で発足した。この京城帝国大学は、六番目の帝国大学であり⁷、「植民地大学」は建学の際に「東洋・朝鮮研究」が重視され、「支那哲学」「朝鮮史学」「東洋史学」「朝鮮語学・朝鮮文学」「支那語学・支那文学」科が設置され、東洋学全般の人文的研究が行われた。ただし、これら「東洋学」系の学科の在籍者は全体の13.9%に過ぎず、研究者の業績の評価はともかく、これらの学科の存在自体が「文化政策」などの統治・行政に与えた影響を過大視することは慎むべきかも知れない⁸。

これ以外にも例えば宗教学・宗教史講座（赤松智城、佐藤泰舜⁹）、社会学講座（秋葉隆）の教官によっても朝鮮半島の「宗教研究」が行われた。全般的な傾向として、多少行政側の意図を超えるような部分はあったにせよ、基本的には「統治のための学問の場」¹⁰としてこの京城帝国大学は機能したと評して良からう。

では、以下で、京城帝国大学とその周辺で活動した代表的な「宗教研究者」の行跡の概要を振り返ってみよう。

1-1 高橋亨¹¹（1878-1967）

高橋亨は、京城帝大に「特別」に設けられた「朝鮮語学・朝鮮文学」第一講座の教授として、発足当初から活躍していた学者である。その関心は「朝鮮人の思想及信仰」を中心としたものであり、例えば『朝鮮人』（朝鮮総督府学務局、1920年）というパンフレットを朝鮮総督府の求めに応じて作成している。

戦後に彼は天理大学に招聘され朝鮮学科教授となり、「朝鮮学会」を発足させるなど、戦前・戦後一貫して「朝鮮研究」のフロントに立った人物と評せる¹²。

彼は元々中国哲学・漢文学が専門であるが、朝鮮儒学研究¹³と朝鮮時代の仏教研究¹⁴に先鞭をつけた人物であるのは間違いなく、その点から再評価の気運も高まっている。ただ、高橋の「宗教研究」の学統を受け継いだものはいたか、という疑問には、韓国人にはほぼ皆無であり、ただ、日本の後進への影響は存在すると答えるのが正確なところだろう。

1-2 赤松智城（1886-1960）

赤松智城は、京城帝大の宗教学・宗教史学講座の初代教授（在1927～41年）であり、近年その再評価や業績の発掘が進んでいる人物である¹⁵（逆に言うと、今までは「忘れ去られた存在」であった）。彼は発足したばかりの京都帝国大学宗教学科の出身である。浄土真宗本願寺派の徳応寺（山口県周南市）に生まれ、祖父は仏教近代化の立役者の一人で留学僧のはしりであった赤松連城、弟には社会運動家赤松克麿、妹に婦人運動家赤松常子がいる。

彼は進学した熊本の第五高等学校で大川周明ら、そして大学院で宇野円空と交流（日本宗教学会創設メンバー）を持ったという。

赤松に関して特筆すべきことは、ヨーロッパの最新学説の紹介者としての役割であろう。赤松

は1920年から1923年まで、ドイツ、フランスを中心に欧州留学し、その当時の最新学説を持ち帰り、それを紹介している。その代表作が、『輓近宗教学説史の研究』（同文館、1929年）である。この書はその題名の通り当時のヨーロッパにおける宗教に関する様々なアプローチを横断的に紹介しているが、全体的な傾向としては「社会学」「心理学」「民族学」的傾向が濃厚である。これは元々彼が哲学的なアプローチを重視しつつも、実証的な学風にも引かれる傾向性があったとすることであろう。特に彼は、宗教の本質として「神聖観念¹⁶」を重視し、それが後のシャーマニズム研究に結びついたことが推測される。つまり、彼にとってシャーマニズムは、「宗教の本質＝神聖観念」の探究の「素材」と見なされた、ということである。

赤松は1927年に京城帝国大学教授に就任して以来、植民地権力を背景にした研究（朝鮮と満州のシャーマニズム研究）を行ったと評されることも多いが、その内容を詳しく見ていくと、「旧弊」の保存、尊重とも捉えられる「純学問的態度¹⁷」を貫いており、植民地支配に資する研究成果であったかどうかは別問題である（もちろん「東洋学」が国策で伸張したのは否定できないが）。例えば、総動員体制に近づきつつあった朝鮮半島において、「心田開発政策」というイデオロギー政策が宇垣一成総督の下行われていたが、その講演会の中で赤松は以下のような発言を残している。

尤も俗信の中には怪しい迷信もあつて、警察の処罰令に触れるやうなものは勿論取締まらねばならぬが、しかしさきにも申したやうに、その中には相当に仏教的な要素もありますから、それは助長して向上させるやうに進めて行かねばならぬ。濫りに信仰心を弾圧しようとすることは宜しく警戒しなければなりません。そこで要するに従来あまりにも閑却されてゐた宗教的教養、或は宗教々育の適当な実施が今日どの方向にも頗る必要であると考へる次第であります¹⁸。

このような態度を最後まで貫いた赤松の学問は再検討されるべきであろう。

1-3 秋葉隆（1888-1954）

赤松智城と組んで朝鮮半島、「満州」地域のシャーマニズム研究に従事したことで著名な秋葉隆は、東京帝国大学社会学科を卒業後（卒論のタイトルは「巫俗の研究」）、ヨーロッパ留学（社会学・文化人類学を学ぶ。ウェスターマーク、マリノフスキーの影響大）を経て、京城帝大設立と同時に社会学講座の助教授として赴任した¹⁹。赤松と協力した研究成果として、赤松・秋葉『朝鮮巫俗の研究（上・下）』（大阪屋号書店、1937年²⁰）と、赤松・秋葉『満蒙の民族と宗教』（大阪屋号書店、1941年²¹）があげられる。

彼は調査に朝鮮人学生を連れて行ったことが推測されるが（巫女の歌の収集作業など）、結局は泉靖一²²という（ある意味）唯一の弟子の育成しかできず、韓国人の「弟子」は育たなかった模様である（もう少し詳しく調べる必要があるが）。

留学中にマリノフスキーらの影響を深く受けただけあって、秋葉も機能主義的な宗教理解を重んじていた。これは同僚である赤松智城、朝鮮総督府の囑託であった村山智順も同様であった。

1-4 村山智順（1891-?）

村山智順は実はその生涯については謎の多い人物であるが、判明していることを述べれば、東大社会学科卒業後朝鮮に渡り、朝鮮総督府嘱託として数多くの調査報告書を作成した人物として知られている。主に朝鮮の民間信仰を担当し²³、以下に挙げるような膨大な報告書を作成した。『朝鮮の鬼神』（1929年）、『朝鮮の風水』（1931年）、『朝鮮の巫覡』（1932年）、『朝鮮の占トと豫言』（1933年）、『朝鮮の類似宗教』（1935年）（全て「朝鮮総督府編」、つまり公文書扱い）などであるが、その特徴を言えば、報告書という性格からか、理論的な論述は禁欲し、資料収集に徹した傾向があった²⁴。そして、その調査は総督府の公的なものであったため、警察を介したものであり、この点が後世の批判の対象となっている。

1-5 チエナムソン 崔南善（1890-1957）

朝鮮人の宗教研究者として、朝鮮民俗学の鼻祖と目される崔南善をあげなければならない。彼は早稲田大学に留学した経験もあり、満州国に作られた建国大学の教授にも就任した人物であるが、朝鮮民族の特性を押し出す「民俗学」を主張したことで名高い²⁵。

彼が注目したのもやはりシャーマニズムであり、彼は朝鮮民族の根幹としての「シャーマニズム（巫俗）」を重視した。これは別言すれば、日本と朝鮮を中心とした、「東北アジア」という「文化圏」を措定し（彼はいわゆる「日鮮同祖論」的な説も唱えている）、中華文明圏からの離脱²⁶を図ったものと見ることもできるだろう。彼の研究の背後には、1920年代からの「国学（朝鮮学）」の流れ²⁷も存在していた。つまり、その巫俗研究の「政治性」²⁸についても、十分な検討がされるべきであろう。

1-6 イヌンファ 李能和（1869-1943）

李能和も崔南善と並んで、朝鮮における「民俗学」「宗教史学」の鼻祖としての評価の定まっている人物である²⁹。彼は官学ではなく、「在野民俗学」の中心³⁰とも言うべき人物であった。

1-7 小括

今まで述べてきたように、日本の侵略と並行して進められてきた朝鮮半島における宗教研究は、先述の先駆者に続いて、ソンジンテ孫晋泰³¹（1900-?）やソンソクカ宋錫夏（1904-1948）ら朝鮮人の「第2世代」の民俗学者たちが現れ、この流れが戦後の韓国における宗教研究の一つの流れを作ったと言ってよいだろう。彼らの特徴を一言で言えば、文献からフィールドワークへという変化である。崔南善や李能和は文献中心に考察していたが、その後継世代は現地調査を重んじる気風を身につけていた。

なお、1930年代から韓国における学術活動が活発となった。その代表的な学会として、青丘学会（1930年）、震檀学会（1934年）、朝鮮民俗学会（1933年）等があげられよう。このような朝鮮学（国学）の本格的始動は日本人と朝鮮人学者の交流をも促した（朝鮮人の学者だけをメンバーシップとした震檀学会は除く）。

また、キムヒョギョン金孝敬（1904-?）という人物も、詳細は不明だが、日本と朝鮮の「宗教学」の架橋となっ

た可能性のある人物である。彼は大正大学宗教学科出身で、「解放」後一時期ソウル大宗教学科非常勤講師を勤め、東国大学校教授になった人物である³²。

まとめるなら、日本や欧米に学びながら、朝鮮人学者も後の宗教研究の礎となるような実力を蓄えていた、ということである。

なお、この植民地期の宗教研究の特徴として、建前上「異民族支配」を標榜しなかった朝鮮総督府は、異民族を研究する「民族学 ethnology」より、「歴史学」や日本の「民俗学 folklore」研究を重視したことも重要である³³。これは最初から「異民族支配」と位置づけられ、いわゆる人類学の成果を活用しようとした台湾の事例と著しい対照をなす。であるから、今で言う文化人類学的研究も、「人類学」という名称が避けられ、「民俗学」という名前で行われていたと言える³⁴。

全体としては京城帝国大学の学統は表面上継承されなかったが、植民地時代の蓄積や引き揚げ者によって、朝鮮に対する眼差しは密かに引き継がれていたとは言えよう。

2. 解放後の韓国における宗教研究の流れ

1945年8月15日、朝鮮半島は日本の植民地支配から解放された。しかしその後スムーズに独立できたわけではなく、周知のように1948年には南北に分かれて独立し、その2年後には「朝鮮戦争」が勃発した。日本との国交正常化は1965年であるが、この朝鮮戦争から国交回復までの「交流の空白期間」はすなわち戦前との断絶、日本の影響からの「離脱」を意味したであろう。その際、新興国としてのナショナリズムが人文・社会科学の基礎に横たわることになり、人材としても、京城帝国大学出身者よりも、留学から帰国した人士が学界をリードする傾向が強かったとされている。

では、解放後の韓国における宗教研究はどのような歩みを経たのだろうか。以下では主にその流れを概観した書籍の内容を少し紹介することによって、その傾向性を把握したい。

2-1 韓国宗教学会編『解放後50年 韓国宗教研究史』（1997）³⁵の目次より

まずは、韓国宗教学会が企画編集した『解放後50年 韓国宗教研究史』という書籍を取り上げてみよう。この書は1995年から2年間、韓国宗教学会が企画した研究会が元になった書物であり、1995年に学会において「韓国宗教史をどのように書くか？」という発表会があり、研究グループが発足した（当時の会長は李恩奉 이은봉 氏）。以下では、まずその目次を書き写してみる。

目次

はじめに（李恩奉 이은봉）

第1部 伝統宗教

仏教—韓国での仏教研究、その現実と課題（チョン・ビョンジョ 정병조）

道教—韓国での道教研究、新しい転換点に立つ（チョン・ジェソ 정재서）

天主教（カトリック）—歴史に根を下ろした教会の歴史（チャ・キジン 차기진）

改新教(プロテスタント)——神学研究の多様性、成功した土着化神学(イ・トクジュ 이덕주)
儒教——韓国での儒教研究、量的拡大と質的深化(チェ・ヨンジン 최영진)
新宗教——新宗教研究はどこまで来たか(金洪喆 김홍철)
巫教——解放後半世紀の韓国巫教研究史(パク・イルヨン 박일영)
古代宗教——韓国古代宗教研究史(ソ・ヨンデ 서영대)
インド宗教——韓国の伝統インド宗教研究史(金浩星 김호성)

第2部 宗教理論

宗教社会——解放後50年の韓国宗教社会学研究史(金鍾瑞 김중서³⁶)
宗教哲学——解放後50年の宗教哲学研究史(イ・ジョンベ 이정배)
比較宗教——未だ比較宗教学は初歩段階(尹元澈 윤원철³⁷)

終章

解放後50年の韓国宗教研究史(李恩奉)

以上のような目次が立てられている。個別の内容には深く立ち入れないが、どのような「宗教」概念、もしくは宗教観が垣間見られるかを探ってみよう。

第一部の「伝統宗教」は、いわゆる個別の宗教史であるが、日本との大きな違いとして、まず「道教」が独立項目になっているのが目を引く。朝鮮半島全体において、道教的伝統は深く根を下ろしているが(代表的なものとしては、呪符の文化や墓地を選定する風水思想があげられるだろう)、これも道教が韓国文化の「根」に存在すると見なされているから、独立して取り上げられているのであろう³⁸。

これは中国などとも共通することであるが、キリスト教が「カトリック(天主教)」と「プロテスタント(改新教もしくは基督教)」に分けられ、別扱いになっている。

あと「儒教」も、「宗教研究」の一分野として扱われている。日本では「中国哲学」か「日本思想史(倫理学)」の一部として扱われがちで、宗教研究に儒教を入れる、ということもあまりないであろう。そもそも「儒教は宗教か否か」という論争も、なかなか決着がつかない問題である³⁹。韓国におけるこのような扱いは、儒教の儀礼研究が宗教研究の一環として行われてきた事とも関係があるだろう。

次に、シャーマニズム(巫教)研究が、戦前からの「伝統」として、これも独立項目になっている。これも、シャーマニズムが朝鮮半島の古代から連綿と続く宗教の一つと見なされ、民族の根幹をなすものとして重視されてきたからであろう。

新宗教研究の章はその名の通り、東学以来の韓国の新宗教についての研究史であるが、ちなみに、朝鮮自生の新宗教のことを韓国で「民族宗教」と呼ぶときがあり、このような呼称にもナショナリズムの表出を見出すことができる⁴⁰。

「韓国古代宗教」と銘打っている章は、神話学、考古学、古代史の「ごちゃ混ぜ」状態である。「信仰対象」「儀礼」「祭場」「宗教専門家」「古代宗教と仏教」「宗教考古学」「高麗・朝鮮時代民俗宗教研究論著目録」に章末の参考文献は分類されている。

なお、「仏教」と「古代インド宗教」が別扱いになっている。日本における「日本仏教(史)」と「インド宗教史」「インド哲学」の分けられ方と同様なものと考えてよいだろう。

「宗教理論」編については、まず「宗教史学」「宗教心理学」などは入っていない。社会学、哲学、そして宗教学本来のあり方とも言える比較宗教という三項が建てられ、内容としては「輸入学問」をどう韓国的に「消化するか」が通底した問題意識であると言える。

2-2 『韓国宗教文化研究 100年 歴史的省察と展望』(1999)⁴¹より

一方、西江大学の宗教学・文化人類学系の研究者を中心に、『韓国宗教文化研究 100年』という書籍も出版されている。この書は 1997 年度の学術振興財団の大学敷設研究所(西江大人文科学研究院)の支援によって行われた三年あまりの共同研究の成果である⁴²。この書の目次から、おおよその傾向を概観し、先ほどの宗教学会のものと比較してみよう。

はじめに (キム・ソンネ 김성례)

韓国儒教研究 1000年 (キム・スンヘ 김승혜)

- I. 20世紀前半期：日帝時代の日本官学者の研究と韓国学者たちの民族主義的研究
- II. 韓国儒教の史学的接近：1970-80年代
- III. 韓国儒教の哲学的接近：1970-1990年代
- IV. 韓国儒教の宗教学的接近：1980-90年代
- V. 韓国儒教の社会科学的接近：1990年代
- VI. 結論

韓国仏教史研究の昨日と今日 (キル・ヒソン 김희성)

- I. 研究の範囲と方法
- II. 主要研究業績の数々
- III. 結論

韓国道教研究の回顧と課題 (キム・ナクピル 김낙필)

- I. 序論
- II. 胎動期
- III. 勃興期
- IV. 定着期
- V. 結論

韓国巫教研究の歴史的考察 (キム・ソンネ 김성례)

- I. 研究範囲と方法
- II. 巫教研究のパラダイム変遷と主要研究業績の評価
- III. 回顧と展望

民族宗教研究の回顧と課題 (キム・ナクピル 김낙필)

- I. 序論
- II. 胎動期 (解放以前)
- III. 勃興期 (解放後から 1980年代)

IV. 定着期 (80年代から現在)

V. 結論

韓国キリスト教研究 100年 (イ・チャンス 이찬수)

I. 韓国キリスト教の研究現況

II. 研究の視角と範囲

III. 韓国キリスト教研究 100年

IV. 結論

以上が目次であるが、これを見て判るように、韓国宗教学会が発行した前掲書と、その「分類」枠組みはほとんど同じである。相違点といえば、「韓国古代宗教」「インド宗教」という枠組みがないことと、キリスト教をカトリック・プロテスタント双方を合わせた、というところしかない。だがこれは、この書が世界宗教の研究ではなく、韓国宗教の研究に範囲を限定しているためである。また、「新宗教」という言葉を用いずに「民族宗教」という用語を用いているのも特徴である。

個々の内容に踏み込むことはできないが、基本的に各論者は、研究史の整理と主要業績の要点の紹介を中心に執筆している。

2-3 Gregory D. Alles ed. 2008, *Religious Studies: A Global View*, Oxon, Routledge. より

さて、世界各国・各地域における宗教研究の現況を概観した上記の書物で、「韓国 Korea」を担当しているのは Chung Chin-Hong (鄭鎮弘^{チョンジンホン}) と Lee Chang-Yick (李チャンイク) という二人の宗教学者である。鄭鎮弘氏は現在ソウル大学校宗教学科の名誉教授、李チャンイク氏もソウル大学校宗教学科出身である。以下にその要点をまとめてみる。

朝鮮半島における「近代」がスタートし、19世紀末のキリスト教の流入で、それまでの朝鮮半島の伝統的な「宗教的営み」に対し、「宗教か否か」という視点が誕生したことが朝鮮半島における宗教研究の原点だという。ただし、「西洋近代」からの視点だけがきっかけではなく、伝統的な学問体系(主に仏教と儒教に関する知的営為)も「宗教研究」の動機となっていたといふ⁴³。

植民地時代は、本稿で先述したような京城帝国大学の研究・フィールドワークが中心となり、一方在野では李能和、崔南善の先駆的業績(朝鮮神話や民族起源についての)が特筆される。

そして1945年の「解放」後、キリスト教が急激な拡がりを見せ、既成宗教への批判的視座が広まった⁴⁴。これには植民地時代、多くの既成宗教が日本の植民地支配に協力したことも一因であろう(キリスト教は少数ながら、頑強に神社参拝などに抵抗した人士がいたし、GHQの政策でもキリスト教は優遇されていた)。

解放後しばらくは、国立ソウル大学のみ「宗教学科」を持っていた。このときのソウル大学宗教学科は、非常にキリスト教神学の影響が強かった。しかし1950年代から、ソウル大宗教学科において「仏教」「儒教」「民間信仰」の講義が出現し、多様な宗教現象を研究する基礎が形成され始めた。続く1960年代に各宗教の書物の出版が相次ぎ、宗教研究の素地を築いた。

その流れを受けたソウル大教授張秉吉^{チモンビョンギル} (1919-2005) の『韓国固有信仰研究』 (1970)、『宗教学概論』 (1975) が、韓国宗教学の画期になったとされる。

一方、宗教立の私立大学でも宗教研究が行われるようになり、その代表として東国大学校 (仏教)、成均館大学校 (儒教) の活動があげられる。これらの活動により、韓国における「比較宗教」研究が盛んになったと言ってよい。

そして 1970 年に (第一次) 韓国宗教学会⁴⁵が発足したが、理由は不明だが 1973 年に一旦解散している。韓国宗教学会は 1982 年から年次大会を再開、1986 年から学会誌『宗教研究』を発刊して再興し、現在に至っている。

最初に宗教学会が設立された 1970 代は、外国からの宗教研究の理論が盛んに輸入された時期でもあり、例えばエリアード『永劫回帰の神話』の翻訳 (鄭鎮弘、1976) など、エリアードをはじめとする宗教現象学が盛んになり、マックス=ミュラー、ファン・デル・レーウ、キャントウェル・スミス、ジョナサン・Z・スミスなどの宗教学の古典が次々と翻訳された。

7、80 年代は隣接他分野との交流も盛んになる一方、「宗教学」のアイデンティティを模索する動きも盛んになり、80 年代には解放後の韓国の宗教学界を牽引してきた人々が引退し、「第 1 世代」の交替が起こった。また民間信仰研究、新宗教研究も「周辺化」されなくなった。

制度的な面で言えば、ソウル大以外の大学での宗教学科、宗教研究組織の設立が相次いだ。列挙すれば、西江大 (1981)、韓国精神文化研究院 (現韓国学中央研究院) (1984)、ソウル大学宗教研究所 (1989)、韓神大 (1993)、カトリック大学 (1994) などである。こうしてみると、キリスト教立の大学において、神学のみならず、宗教研究を重んじる風潮が出現してきたことが窺えよう。またそれらの機関による定期刊行物も増加し、大学における宗教学関連講義も増加した。

また、関連学会の設立も相次ぎ (韓国宗教史学会:1972、韓国宗教教育学会:1995、韓国新宗教学会:1999 など)、宗教研究に厚みを持たせている。なお韓国では、宗教研究と言うより「宗教文化」研究と称することが多く、これは韓国における宗教研究の各分野における拡散を物語っているだろう。

3. 今後の課題

以上、大づかみにこの 100 年ほどの朝鮮半島における宗教研究の流れを追ってきたが、研究それぞれの内容に踏み込むことができず、表面的な評価に留まってしまった。膨大な宗教研究の全てをカバーすることは不可能であるが、今後はいくつかの課題を中心に、この研究を進めていきたいと思う。以下で現在私が考えている課題を列挙して、この稿を終えたいと思う。

(1) 韓国近代における「宗教概念」研究の参照

朝鮮半島において「宗教」概念自体は、日本から輸入されたものであるということだが、韓国の独自性は果たしてどこにあるのだろうか。昨今の宗教概念批判を踏まえつつ、先行研究⁴⁶を踏まえつつ再考してみたい。

(2) 戦後 (解放後) の韓国宗教学の沿革

今回はリサーチ不足のため、例えば 1970 年代初頭になぜ韓国宗教学会は一旦頓挫したかなどを調べることができなかった。いわゆる「宗教学研究」者と自認する研究者たちがどのような歩みを経たのかを調べたいと思う。

(3) 宗教学教育の詳細な歴史的沿革の調査

各大学の宗教学科や宗教研究のための研究機関の設立などの概要は分かったのだが、それがどのように発展したか、また現在ほどのような形態を取っているか、各大学における特徴（例えば民俗学・文化人類学的研究が卓越している大学など）を捉えることはできなかったのもので、各大学・機関においてどのような宗教研究がなされているかのリサーチを行いたいと思う。

註

- 1 Chung Chin-Hong and Lee Chang-Yick 'Korea' in Gregory D. Alles ed. 2008, *Religious Studies: A Global View*, Oxon, Routledge, p.177.
- 2 例えば、儒教の研究機関であった「成均館」の存在を想起せよ（戦後には大学に昇進）。ただ、植民地期には「経学院」と改称され、儒林の統轄機関とされた。柳美那「植民地期朝鮮における経学院—儒教教化機関と儒教イデオロギーの再編」、『朝鮮史研究会論文集』42集、緑蔭書房、2004年、参照。
- 3 崔吉城『「親日」と反日』の文化人類学』明石書店、2002年、52-60頁。
- 4 Chung and Lee, op. cit., pp.175-176.
- 5 日本産の翻訳語としての漢語が東アジアに及ぼした影響については、山室信一『思想課題としてのアジア』岩波書店、2001年、第二部第七章第三節「日本漢語の流布と政治文化の変容」、参照。
- 6 龍溪書舎から2011年に影印復刻された。
- 7 発足当初の京城帝国大学の性格については、通堂あゆみ「京城帝国大学法文学部の再検討：法科系学科の組織・人事・学生動向を中心に」、『史学雑誌』117-2、2008年、参照。
- 8 同上、59頁、参照。
- 9 佐藤は赤松の後任として宗教学・宗教史講座の教授となった人物。曹洞宗海外研究生の経歴を持ち、戦後は駒澤大学及び東洋大学教授を歴任。まだこの人物については調査半ばである。
- 10 京城帝国大学と植民地権力の「一心同体」性については、鄭圭永『京城帝国大学に見る戦前日本の高等教育と国家』東京大学大学院教育学研究科博士論文、1995年、朴光賢『京城帝国大学と「朝鮮学」』名古屋大学大学院人間情報学研究科博士論文、2003年など参照。
- 11 高橋亨の業績の全般的な研究として、権純哲「高橋亨の朝鮮思想史研究」、『埼玉大学紀要』33-1、1997年、参照。
- 12 高橋亨の詳しい経歴、著作一覧については、朝鮮学会『朝鮮学報』14輯、1959年、と『朝鮮学報』第48輯、1968年にある。
- 13 高橋亨の朝鮮儒学研究については、近年川原秀城・金光来編『高橋亨朝鮮儒学論集』知泉書館、2011年にまとめられた。
- 14 高橋の主著である『李朝仏教』（宝文館、1929年）に現れている朝鮮仏教理解についての「オリエンタリズム性」の指摘は、拙著『植民地朝鮮の宗教と学知』青弓社、2009年、第4章で行なっているので、参照されたい。なお、日本における朝鮮仏教の研究史については、한국유학생인도학불교학연구회 엮음『일본의 한국불교 연구동향』藏経閣、서울、2001年、(韓国留学生印度学仏教学研究会編『日本の韓国仏教研究動向』ソウル)、参照。
- 15 例えば、ソウル大学人類学教授である全京秀^{チョンギョウ}は立て続けに赤松を再評価する論考を執筆している。全京秀（板垣竜太訳）「赤松智城の学問世界に関する一考察—京城帝国大学時代を中

- 心に」、『韓国朝鮮の文化と社会』4号、2005年、同（太田心平訳）「植民地の帝国大学における人類学的研究—京城帝国大学と台北帝国大学の比較」、『「帝国」日本の学知 第3巻』岩波書店、2006年、同（川瀬貴也訳）「『宗教人類学』と『宗教民族学』の成立過程—赤松智城の学史的意義についての比較検討」、『季刊日本思想史 72号』ペリかん社、2008年、参照。また、菊地暁も近年赤松の業績の洗い出しを行っている。菊地暁「赤松智城ノオト—徳応寺所蔵資料を中心に」、『人文学報 第94号』京都大学人文科学研究所、2007年、同「智城の事情—近代日本仏教と植民地朝鮮人類学」、坂野徹・愼蒼健編著『帝国の視角／死角』青弓社、2010年、参照。
- 16 赤松の博士論文は『原始的の神聖観念 (Primitive Sacredness) の研究』（1920年）と題されたもの。赤松の博士論文に関しては、菊地暁氏からご教示を得た。
 - 17 菊地暁前掲論文（2010年）、91頁。
 - 18 赤松智城「朝鮮の仏教と民間信仰」、朝鮮総督府中枢院編『心田開発に関する講演集』、1936年、169頁。
 - 19 秋葉隆の簡略な評伝として、島本彦次郎「秋葉隆博士の生涯と業績」、『朝鮮学報』9号、1956年、参照。
 - 20 大空社から1997年に復刻（アジア学叢書）。
 - 21 大空社から1996年に復刻（アジア学叢書）。
 - 22 泉の伝記として、藤本英夫『泉靖一伝—アンデスから済州島へ』平凡社、1994年、参照。
 - 23 村山智順の調査の性格については、朝倉敏夫「村上智順師の謎」、『民博通信』79号、1997年、野村伸一「村山智順論」、『自然と文化（特集：村山智順が見た朝鮮民俗）』66号、日本ナショナルトラスト、2001年、青野正明『朝鮮農村の民族宗教』社会評論社、2001年、第二章などを参照。
 - 24 川村湊『「大東亜民俗学」の虚実』講談社、1996年、50頁。
 - 25 例えば崔南善による朝鮮民族の始祖神たる檀君の「発見」及び「再解釈」については、全成坤『日帝下文化ナショナリズムの創出と崔南善（日本語）』J&C、ソウル、2005年、第3章、参照。
 - 26 坂野徹『帝国日本と人類学者』勁草書房、2005年、318頁。このような「シャーマニズムを介した日鮮同祖論」は、日本人学者では鳥居龍蔵が「民族上より見たる鮮、支、西伯利」（『東方時報』5-4、1920年）などで早くから述べている。
 - 27 1920年代から高まる朝鮮「国学」運動については、鶴園裕「近代朝鮮における国学の形成—「朝鮮学」を中心に」、『朝鮮史研究会論文集』35、緑蔭書房、1997年、参照。
 - 28 シャーマニズム研究の「政治性」については、최석영『일제하 무속론과 식민지권력』서경문화사、서울、1999、（崔錫榮『日帝下巫俗論と植民地権力』書景文化社、ソウル）、そのフィールドワークの性格については同「朝鮮植民地期における巫俗に対する現地調査方法の系譜」、上田崇仁ほか編『交渉する東アジア』風響社、2010年、参照。
 - 29 彼の宗教史学的研究についての再評価として、李鍾殷外共著『우리 문화의 뿌리를 찾는 李能和研究—韓国宗教史학을 중심으로』集文堂、서울、1994（『我が文化の根を探し求める李能和研究—韓国宗教史学を中心に』、ソウル）、参照。
 - 30 岩崎継生「朝鮮民俗学界への展望」（『ドルメン』2-4、1933年）という論考において、「講壇民俗学（アカデミックな制度上のもの）」と「官房民俗学（総督府の囑託による業績）」と並んで朝鮮人の「在野民俗学」という分類がなされている。
 - 31 孫晋泰の学問の性格については、金廣植「植民地「郷土」を研究することの意味—朝鮮学、朝鮮民俗学、孫晋泰の再考」、大阪大学日本学研究室『日本学報』25号、2006年、参照。彼は早稲田大学史学科で西村真次に学んでいる。
 - 32 全京秀（岡田浩樹・陳大哲訳）『韓国人類学の百年』風響社、2004年、124-127頁。
 - 33 崔吉城「日帝植民地時代と朝鮮民俗学」、中生勝美編『植民地人類学の展望』風響社、2000年、205頁。
 - 34 全京秀前掲書、64頁。
 - 35 한국종교학회 편『해방후 50년 한국종교 연구사』도서출판 창, 서울, 1997. 以下、この書

-
- の各章の執筆者については、漢字が確定できるものだけ漢字表記とした。
- 36 現ソウル大学校宗教学科教授。宗教社会学、現代宗教理論専攻。
- 37 現ソウル大学校宗教学科教授。韓国仏教専攻。現在のソウル大学宗教学科のスタッフは以下のサイトを参照。<http://religion.snu.ac.kr/introduction2.html> (2012.7.8.閲覧)
- 38 韓国における道教の古代からの歴史については、車柱環 (三浦國雄・野崎充彦訳) 『朝鮮の道教』人文書院、1990年、参照。
- 39 日本における儒教の宗教性に関する議論の整理として、池田秀三『自然宗教の力』岩波書店、1998年、参照。
- 40 韓国の新宗教の連合体として、社団法人韓国民族宗教協議会というものが存在し、『韓国民族宗教総覧』(1992)という書籍を出しているが、奥付も、韓国の檀君に由来する「檀紀」を使用するなど、民族主義色が濃厚である。ちなみに韓国の宗教学者が解説論文を多数執筆している。
- 41 김성례, 김승혜, 길희성, 김낙필, 이찬수 『한국 종교문화 연구 100년 ; 역사적 성찰과 전망』 청년사, 서울, 1999.
- 42 Ibid., p.6.
- 43 Chung and Lee, op. cit., pp.176-177.
- 44 Ibid., p.179.
- 45 現在の学会のサイトは <http://www.kahr21.org/> (2012.7.10 閲覧)。このサイトに「学会沿革」のコーナーがあったが、簡略なもので、あまり参考にならなかった。ちなみに現在の会長は姜敦求氏。
- 46 例えば、張錫萬『開港期 韓國社会의 "宗教"概念 形成에 관한 研究』 서울大学校人文大学博士論文、1992。